

住みよさ・働きやすさへの高い評価に理由あり 目指すのは健康日本一のまちと舞台芸術の聖地

数々の特徴や強みが構築する
エリア屈指の暮らし良さ

愛媛県の中央部、松山市や伊予市、伊予郡（砥部町、松前町）なども含む「中予地方」に展開する広大な松山平野は、古来、暴れ川の異名を持つ現在の1級河川・重信川水系の扇状

地として形成されてきた歴史を持つ。

この松山平野の東部に位置して、県都・松山市にも隣接する東温市は、平成16（2004）年9月21日、重信川を挟んで隣接していた温泉郡重信町と同・川内町の2町による合併で市制施行。令和6（2024）年には市制施行20周年の節目を迎えている。

公募の結果、旧温泉郡の東部に位置することから、伝統的に使用されてきた地域名「東温」を市名に冠することになった東温市は、県都・松山市とは国道11号と伊予鉄道で直結している。どちらを利用しても約30分でアクセス可能、松山空港からも松山自動車道を利用すれば車で約30分という、非常に良好な交通環境を有している。

加えて、令和6年3月に、松山自動車道・川内ICに次ぐ市内で二つ目のIC「松山自動車道・東温スマートIC」が開通したことによる波及効果は、交通アクセスの向上だけにとどまらない。IC周辺に整備が進む新工

業団地に対する、企業からの応募・問い合わせの数が急増したのをはじめ、既に多岐にわたって現出している。

東温市エリアは、古くから農業を基幹産業として発展してきた。中でも米（愛媛県のオリジナル品種・ひめの凜、各地域のブランド米ほか）、麦（愛媛県の中心的産地）、野菜（ブロッコリー、ネギ、さといもほか）、イチゴ（紅ほっぺ、紅い雫ほか）、花卉類（ユ

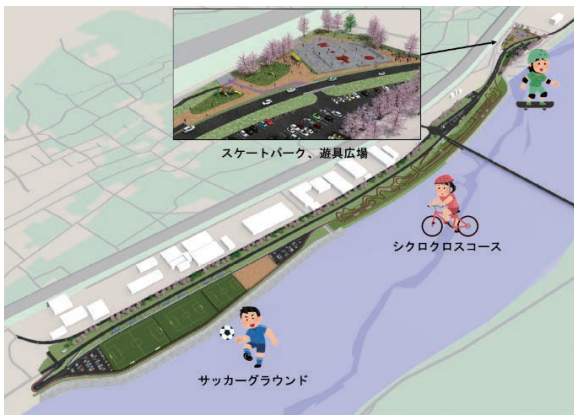
かとう あきら
加藤 章
東温市長



「坊っちゃん劇場」で華々しく開催された市制施行20周年記念式典（令和6年9月21日）



「市民一人ひとりの声を大切にすまちづくり」の要・タウンミーティングは毎年開催。写真は市制20周年記念「子どもミーティング」の様



重信工業団地前で進む「重信川かわまちづくり公園」整備事業。サッカー場、遊具広場、スケートパーク、シクロクロスコースなどを整備中



東温市の地域経済に大きな波及効果をもたらしつつある松山自動車道・東温スマートICの開通



行政とJAが協働で新規就農希望者の育成を目指す「東温担い手農業生産団地」

ルーツは昭和14/1939年開院の軍事保護院しょうい傷痍軍人愛媛療養所や、愛媛大学医学部整形外科教室との連携でリハビリテーションに特化した医療に定評のある愛媛十全医療学院附属病院(昭和57/1982年、旧川内町に開院)など、総合的かつ高度な機能を有する医療機関の立地を核に、市域全体の医療環境の拡充が進んでいるのだ。

東温市における医療環境の充実ぶりを示す証しの一つとして、加藤章東温市長は「人口比の医師数の多さ」を挙げる。

り、ユーカーリ、シキミほか)などの生産地として評価が高い。

全国の農業地帯と同様、従事者の高齢化や後継者不足などの課題はある。しかし、地域ごとの特色を生かして、魅力ある産地づくりを推進するべく、各種の農業振興支援策を強化。新規就農者の育成・確保に向けた積極的な支援(JAえひめ中央新規就農研修センターの東温担い手農業生産団地の設置など)も次々実施するなど、新時代の農業環境の構築に向けた施策・事業に取り組んでいる。

また、伊予市・久万高原町・松前町・砥部町と共に《松山圏域》に属する東温市は、特に市制施行以後も、県都・松山市のベッタウンとしての発展が著しい。その要因として挙げられるのは、松山市に隣接するという地理的条件や、交通環境に優れた立地条件だけではない。そうした要素も相まつてのことだが、東温市には、近年における製造業の盛んな進出による豊富な雇用の場の創出がある。

さらに特筆すべき要因として、東温市には非常に優れた医療環境がある。市内にはまず、国立大学法人・愛媛大学医学部と同一附属病院が立地(昭和51/1976年、旧重信町に開院)している。また、独立行政法人国立病院機構・愛媛医療センター(現在の名称に変更したのは平成25/2013年だが、



「全国の地方自治体(※1741市区町村)の中で、人口1万人当たりの医師の数が最も多いのは東京都千代田区です。2番目は東京都文京区で、その次が実は東温市(人口1万人当たり177.8人)であり、市だけに限れば東温市が第1位なのです」(加藤市長)

こうした生活環境の充実度は、子育て世代に人気の大型商業施設の相次ぐ進出にもつながっている。合併時(平成16年9月)に3万4493人だった人口は、翌平成17(2005)年の国勢調査で3万5278人に微増したのをピークに、微減傾向が続いている。しかし、市制22年目の現在もほぼ横ばい(本年2月2日現在3万2648人)を維持しているのは、生活環境の充実度があるからこそその結果だろう。



温水プールやトレーニング室も備えた日帰り温泉施設「東温市ふるさと交流館／さくらの湯」は、市内内外を問わず人が訪れる交流拠点施設だ

東温市一帯には旧温泉郡の郡名の由来でもある地域資源として、優れた泉質（主に神経痛や筋肉痛などに治療効果のあるナトリウム塩化物・炭酸水素塩温泉など）の温泉も湧出している。宿泊設備を備えた大規模温泉施設や日帰り温泉施設があり、市内外から訪れる湯客・観光客などによる「にぎわいの場」を創出している。

さらに、市域中央部を貫流する重信川や、皿ヶ嶺連峰県立自然公園などの豊かな自然環境が相まって、バランスの取れた都市近郊型田園都市としての魅力を形成している。こうした居住地としての総合的な実力・魅力の高さは、東洋経済新報社主催の「住みよさランキング」で、東温市が市制施行の翌年から最新（市制21年目）の令和7（2025）年度版に至るまで、20年連続で愛媛県内ベスト3の座を維持していることから、よく分かる。

加藤市長は大学を卒業した昭和48（1973）年4月に旧重信町に入職。東温市が発足する際には合併対策室長も務めた。東温市発足後も保健福祉部長、総務部長、副市長などの要職を経て、平成25年に副市長を退任するまで約40年間にわたり、職員・市幹部として東温市エリアの発展に尽力

した。その後、愛媛県生涯学習センター副所長を経て、平成28（2016）年10月に実施された東温市長選挙に出馬して当選。同年11月に就任してから、本稿執筆時（本年2月）の時点で3期10年目を迎えている。

このようにさまざまなか立場から、東温市の発展に半世紀にわたり関わってきた加藤市長が、東温市の「持続可能な近未来」を構築するべく、市長就任以来、最も力を傾注してきた施策の一つが、東温市の特徴や多彩な強みを相乗効果的に活用するまちづくりの展開だ。

具体的には、豊かな医療環境や自然環境、温泉資源などを背景に推進する、新たな成長産業としての「ヘルスケア産業およびものづくり産業」を核とする「健康日本一のまちづくり」である。

温泉と優れた医療環境で紡ぐ「健康日本一」のまちづくり

「東温市の医療環境をもう少し詳しく説明しますと、市内には現在、27の医療施設お



重信川河川敷の春の風物詩として知られる見事な桜並木



ゴールデンウィーク前後に山之内地区自治会が重信川「除けの堰堤（よけのえんてい）（国指定登録有形文化財）」で行う「鯉のぼりの架け渡し」は観光客にも大人気

よび13の歯科医院があり、ベッド数は総計1135床に上ります。そして、愛媛大学医学部附属病院の周産母子センターを軸に、地域の診療所と病院の連携で図る周産期医療から高度医療までも含め、全ての年代の市民・関係者に、地域完結型の医療を提供することが可能な態勢が構築されています。

こうした全国でもまれに見る医療環境に加え、優れた泉質の温泉や豊かな自然環境、地域で生産される安全で豊富な食材など、自慢の地域資源がたくさんあります。こうした恵まれた環境をフルに活用するため、東温市では平成27（2015）年に、東温市と愛媛大学医学部および同附属病院、大学院医学系研究科などを中心に、市内の中小零細企業、東温市医師会、東温市歯科医師

東温市

市 政 ル ポ

(愛媛県)



東温市の優れた医療環境の核となっている愛媛大学医学部附属病院

会との連携による《東温市健康医療創生研究会》を発足させました。

目的は東温市ならではの地方創生事業を創出することにあります。一つ目は、愛媛大学と市内の中小零細企業が共同で進める医療・介護関連機器の部材供給事業の創出、さらには研究・開発などを骨子とする『ものづくり産業の創生』事業です。

もう一つは『ヘルスツーリズム』の企画・展開による、東温市の環境下でなければ体験することができない旅行商品(ツアー)の開発や、生活の質を向上させることのできる健康食品などの開発を行う『ヘルスケア産業の創生』事業です。

私が市長に就任したのは、東温市健康医療創生研究会が発足した直後の時期でしたが、この事業は私が職員の時代から議論・検討されていたものです。そして、研究会発足からこの10年間の展開で得られた経験や実績を基に、今後は最先端のICT関連技術などを活用しながら、市民の健康増進や健康寿命のさらなる延伸を目指し、未病対策なども含めた『どうおんスマートヘルスケア創出』事業のより一層の推進を図ってきたいと考えております(加藤市長)

一連の取り組みの中でも、とりわけ注目されるのは、令和6年から本格的に開始された、市民や市内で働く人々に対する健康増進事業「移動型健康サポート事業/いきいきマース」だ。

「どうおんスマートヘルスケア創出」事業の根幹を成すシステムとしては、中山間地域の市民や企業の従業員などと、医療機関の医師などを遠隔医療システムで結ぶ《オンライン健康相談》と、Webシステムを使った簡易認知測定《あたまの健康チェック》、さらにはスマートフォンで健診情報やバイタルなどを登録することで、事業参加者の健康維持を支援する《健康アプリを活用したサービス》に大別できる。前出「移動型健康サポート事業/いきいきマース」は、これらのサービスを円滑に、もれなく実施するため、遠隔医療システム



「どうおんスマートヘルスケア創出」事業の先導役として活躍のヘルスケアMaaS車両(お披露目式)



市民および市内企業従事者の健康増進を目指しMaaS車両の内外で実施されるスマートヘルスケア事業

ムをはじめとする最新のデジタル機器を搭載した車両(ヘルスケアMaaS車両)を、中山間地や市内企業、公共施設、公民館、各種事業所などに派遣する。そして、健康相談や健康講座・運動講座などの実施、さらには内臓脂肪測定や認知度チェックなどの各種検査を現地で行うことにより、医師はもとより、相談者も移動負担のないままに目的を達することができる仕組みだ。

この事業は同時に、市民や市内企業の従業者に対し、未病のうちに健康増進への意識改革の実を上げる効果をもたらし、結果的に人手不足が叫ばれる医療現場にとって、診療の必要のない患者の受診が減るなど、各種の負担軽減につながる効果が期待できる。

「この事業の背景には、全ての地域に暮らす市民や、市内の企業で働く方々が、地域内で均一な健康増進サービスを享受できる体制を構築したいという私たちの思いがあります。特に中山間地域に暮らす市民の皆さまに對しては、最新の遠隔医療の技術を駆使することによって充実した医療環境をお届けできるため、SDGsの重要な取り組み目標でもある『誰一人取り残さない』まちづくりを、医療サービスの面からも図ることができると期待しております。

同時に、こうした事業が可能になるのも、1次医療から3次医療までの全ての医療機関および診療科をカバーしている、東温市ならではの医療環境のためのものであると自負しております(加藤市長)

東温市流・市民協働の表象 市民が主役の舞台とまちづくり

周知の通り、医療専用車としてのMaas車両の導入事例は、特に中山間地を持つ各地で少しずつ進みつつある。しかし、加藤市長の言葉にもあるように、基本的な医療環境にこれだけ恵まれた東温市におけるMaas車両の導入は、そのもたらされる効果の大きさという意味から、今後さらなる相乗効果も見込まれるだろう。

また、ヘルスツーリズムに関しては、東温市内の温泉施設や観光施設、地元産の食



愛媛県立みなら特別支援学校のOBが結成する「ミュージカルフレンズ」による介護施設での公演。「舞台芸術の聖地化」は全市民参加の文化運動でもある

を楽しみ、絶景を巡るコースなどを組み合わせさせた動画をYouTubeで公開。さらには、モニターツアーを随時行うなど、ニーズを広範に探るための地道な取り組みが進められてきた。

事業開始直後にコロナ禍が発生したため、一時中断の形になっていたが、将来的な移住・定住の促進につながる関係人口創出事業としても、スマートヘルスケア創出の一翼を担う事業としても、ヘルスツーリズム事業には、大きく成長する可能性がある。今後成されるはずの本格的な取り組みが、大いに期待される所だ。

東温市におけるもう一つの特徴的なまち

づくり事業として、本稿が目指したいのは、「舞台芸術の聖地化」を目指す「アート・ヴィレッジとうおん構想」だ。同構想の出発点は、市制施行3年目の平成18(2006)年に誕生した「坊っちゃん劇場」の存在にある。

全国的にもユニークな地域拠点型劇場という位置付けの同劇場は、東温市を拠点に、四国や瀬戸内海沿岸地方の史実や伝統文化、偉人たちの活躍を掘り起こす形でミュージカル化するプログラムを、原則として毎年創作。行政と緊密に連携しながら行う、地域振興の方策としての演劇運動の形態は、年間を通して一つの演目を上演する独自の興行形態などと共に、中央の演劇界からも注目を集め、既に「新たな地域資源」ともいえる存在感を放っている。

「この『アート・ヴィレッジとうおん構想』は、私が市長に就任した翌年、平成29(2017)年から本格的にスタートしたオンラインワンのまちづくりを主目的とする事業構想です。『東温市といえば舞台芸術の聖地』という新たなブランディングを図るとともに、舞台芸術を核とする文化芸術の多角的な産業化を図っています。

坊っちゃん劇場の興行には、熱心な舞台ファンが毎年全国から訪れます。偶然訪れた観光客にとっても、旅先で味わう本格的ミュージカル体験は良い思い出となることでしょう。また、新たな演目が通年で毎年演じられる坊っちゃん劇場の興行形態が初

東温市

(愛媛県)

市 政 ル ポ



取材時に「坊っちゃん劇場」で上演されていた『新 鶴姫伝説～鏝に白い花を～』。平日の朝から多くの観客が詰めかけていた

めて可能にするアーティストたちの移住、その結果得られるアーティストと地域や市民との交流、市民の文化芸術活動のレベルアップと地域愛の醸成など、各種の相乗効果を上げていくと、経済波及効果だけではないメリットがたくさんあります」（加藤市長）

「アート・ヴィレッジとうおん構想」では、坊っちゃん劇場との相乗効果の拡大を図るため、文化芸術活動の交流拠点である「東温アートヴィレッジセンター」を官民共同で設立し、本格的な舞台芸術が楽しめる基盤を構築。平成30年4月1日の開館から、同センターの利用者は延べ10万人を既に突破している。また、参画したアーティストの中には、その後も充実した環境下での芸術活動を求め、移住して独自の活動を継続する例も少なくないという。

（※坊っちゃん劇場と東温アートヴィレッジセンターは、宿泊設備付き温泉施設やショッピングセンターなどが立地する複合レジャー施設レスパスシティの敷地内）

「アート・ヴィレッジとうおん構想」は令和7年度末で計画期間がいったん終了。本年度で足掛け10年目を迎えることになるが、

東温市では後継となる計画を策定し、市民協働によるさらなる文化芸術の振興を図っていくとしている。今後は構想のさらなる進化および深化が、多方面から図られていくことになる訳だが、10年目を迎えた「アート・ヴィレッジとうおん構想」の成功の証しは、市民への舞台芸術の浸透度の深さからも、既に見て取れる。

「例えば令和6年に迎えた市制施行20周年記念事業は文字通り多岐にわたりました。しかし、私にとつてのメインイベントの一つは、地域の歴史を基に市民が主役となつて制作・公演された市民ミュージカル『人と川と祈りと〜重信川伝説』でした。市民ミュージカルの公演は7年ぶり2回目でしたが、『アート・ヴィレッジとうおん構想』を通じて舞台芸術に親しんでこられた市民の皆さんが、坊っちゃん劇場と関わりの深い演出家の指導で、さらに坊っちゃん劇場を舞台に総力で創り上げた市民ミュージカルは、まさに東温市の市制施行20周年にふさわしい感動的な力作でした」（加藤市長）

地域創生には、地域性に応じた多様なカタチがある。これまで述べてきたように、東温市における地域創生もまた、東温市ならではの地域性に根差した、独自のカタチが形成されつつある。

実際、優れた医療環境と舞台芸術という、一見、関連性のない地域資源（財産）を核とする地域活性化事業の同時推進は、現状におい

ても、地域の人々の生き生きとした日常生活を紡ぎ出すという意味において通底し、既に見事に連環しているといえるだろう。

互いに次のフェーズに入った「健康日本一のみちづくり」と「舞台芸術の聖地化」が、今後どのように連動しながら、地域の新たな元気を相乗効果的に創生していくのか。興味は尽きない。

（取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和7年12月19日）



市制施行20周年記念事業の目玉は重信川がテーマの「東温市民ミュージカル」の上演（於・坊っちゃん劇場）